

教材・テスト作成のための CEFR-J リソースブック

投野由紀夫, 根岸雅史 編著

A5・264頁・
本体2,800円＋税

[評者]
尾関直子



CEFR-J を最大限に活用する

本書は大きく、2つのセクションに分けることができる。CEFRやCEFR-Jに関する基礎的な知識や参照レベル記述プロジェクトについて解説する比較的アカデミックな部分と後半のCEFR-Jを生かした指導、教材作成などを説明する実践的な部分である。

CEFR-Jを知らない人もCAN-DOリストなら、既に中学、高校卒業時の英語教育の到達目標にしたり、年間の到達目標、日々のレッスンに取り入れている教員が多いと思う。そういう教員にとっては、自分が使用しているCAN-DOリストは、どのような背景の下に生まれてきたのか、前半を読めば理解できるようになる。また、前半では、新学習指導要領にCEFRの知見が生かされていることについても言及されている。例えば、従来の「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の4技能の分け方から、話すことが「発表」と「やりとり」に分かれ5領域になったことやCEFRのディスクリプターの「～できる」を学習指導要領では教師の視点から「～できるようにする」と書かれたことなど、両者は非常に関係性が高いことが示されている。

後半は、すぐにでも教材や指導に生かせる情報が多くある。私は、文法指導にはほとんど興味がなかったが、「CEFR-J Grammar Profileを文法指導にどのように活かせるか？」を読み、実際に使ってみてみたいと思った。このGrammar Profileを使えば、各文法項目をCEFRのどのレベルで導入するのが妥当であるかが明らかになる。(その対応表が本書の巻末に付録として付いている。)例えば、仮定法過去ならば、B1.1-B2.1とある。これは、導入時期はB1.1ぐらいであるが、うまく使えるようになるのは、B2.1ぐらいであることを示している。また、生徒などが書いた英文を入力すると、その英文のCEFRのレベルを文法の観点から推定できるツールについての情報もある。

さらに、「CEFR-J Text Profileをリーディング／リスニング指導にどのように活かせるか？」の章では、入力したテキストの構文や語彙からCEFR-Jのレベルを推定することができるウェブアプリケーションであるCVLAの紹介がある。このアプリを使えば、自分が作成したテキストや現在使用している教科書をコピーして貼り付ければCEFRのレベルが推測できるようになっており、指導や受験対策に活用できる。

本書は、CEFR-Jを教育や研究に生かしたいと考える教員、具体的には、教材やテストを作ったりや生徒の英語の分析をしたりするときに、信頼性や妥当性を持ったものにしたいと考えている教員に有益な情報が満載である。

(おぜき なおこ・
明治大学国際日本学部教授)

英語教育論文執筆 ガイドブック

ジャーナル掲載に向けたコツとヒント
廣森友人 編著

A5・178頁・
本体1,700円＋税

[評者]
笠原 究



英語教育論文の執筆から出版までを網羅した指南書

本書は英語教育論文の執筆から出版までの過程を簡潔に分かりやすく解説した良書である。執筆陣は国内外の著名なジャーナルに論文を発表し、かつ査読者としても活躍している方々である。研究の仕方を説明した類書はあるが、論文がどのように審査され、編集されるのかを査読者側から明かした本は他にない。これから論文を書くようとする人には大いに参考になるであろう。

本書の序論では論文執筆の利点が示される。「研究内容を言語化することでその内容を深く理解できる」と説く。執筆することで、関連文献を調査し、自分の研究・実践を理論面から評価し、次の一歩へと進むことができる。また、採用されれば読者から多様なフィードバックを得ることができる。論文を執筆することは、教師として「主体的・対話的で深い学び」を実践することに他ならない。

第1部の最初には、作文と論文の違いが述べられている。作文では自分の考え等を自由に(時に情緒的に)述べることができる。しかし論文には「問い」と「答え」がなければならない。「問い」は

先行研究を踏まえて設定されなければならない。「答え」には論理性、一貫性がなければいけない。そのためには一定の型に従わなければならないことが説明されている。

第1部の続章では、量的研究論文、質的研究論文、文献レビュー論文、理論論文、方法論論文の特徴が分かりやすく説明されている。自分の書きたい論文がどのタイプになるかの明確な指針を与えてくれるだろう。

第2部は「論文をどのように書くか」がテーマである。論文執筆でまず大切なことは良い「問い」を立てることである。良い問いを立てることができれば、執筆の半分は終わっていると言えるだろう。本書は良い研究課題の立て方について、大変実用的な助言を与えてくれている。

良い文章を書くためには、常に読者を意識することが肝要である。論文を執筆する上で大切なことは査読者を意識することである。第2部は執筆の準備から出版までの過程を丁寧に示している。特に査読者がどのような視点で論文を審査するかについての詳しい記述は、執筆上の大きな助けになるだろう。査読者のコメントにどう対処するかの記事もありがたい。

多忙な現場の先生方が論文を執筆することは並大抵のことではない。しかし勘や経験だけに頼らず、自分の実践を理論面から深く掘り下げたいと願う教師にとって、論文執筆は大きな示唆と利益を与えてくれる。その一步を踏み出したいと願うなら、ぜひ本書を手にとっていただきたい。

(かさはら きわむ・
北海道教育大学旭川校教授)

英文法には「意味」がある

デイヴィッド・クリスタル 著
伊藤 盡、
藤井香子 訳

A5・258頁・
本体2,500円＋税

[評者]

石黒太郎



英文法教育に欠落している意味と魅力を取り戻す

本書はクリスタルが2012年から4冊出している一般向けの英語に関するシリーズのうち、文法を取り上げた第3作を翻訳したものである。この著者はこれまで英語に関する著作を長年にわたり数多く出してきた、この分野の第一人者である。

20世紀後半には英国でも文法教育が「すっかり消滅」し、多くの人にとって文法は価値のない、面白くないものになってしまった。著者はなぜ英国で文法教育がそのような憂き目に遭うことになったのかという背景を随所に盛り込みながら、英語を母語とする子供がどのように英文法を習得するかを解説し、また文法教育に言語学の新しい知見を融合させれば英文法は魅力的（グラマラス）にすなると、極めて平易な文体で語る。

本書は29章からなる。10章までは2人の女兒が母語である英語の文法を習得する過程をたどると同時に、文法用語や文法概念の歴史的背景に関する説明を各章で展開する。著者自身が家庭内で経験した微笑ましいエピソードと女兒の発話例が読んでいて愉快である。

11章と12章は本書の後半への導入となる章で、言語そのものにつ

いて語るメタ言語、規範主義が登場する。そして13章からは書名の言葉どおり文法には意味があること、そして文法教育の現場に導入されないままになっていると著者の考える「文法の知識」があれば文法を意味のあるものにできるといことが論じられていく。多義性から意味論、意味論から能動態と受動態、受動態から語用論、語用論から用法、用法から文体…とテーマが次々に入れ替わり、20章では最近研究が盛んな二項熟語表現 binomials まで考察する。

21章から26章は英語史における文法の変化を概観し、世界の英語、インターネットの英語を紹介する27章から29章では規範主義によって文法教育が魅力を失いながらも、2000年以降、規範文法書が急増していることが報告され、最後に文法を魅力的にするための10か条が提唱される。

本書はその原書のもつ軽妙な語り口を十二分に日本語で再現している。「訳者あとがき」にあるように、日本の読者になじまないと判断した原書のコラムや本文をあえて割愛し、通読しやすくしている。原書を読んだ評者も冗長と感じた部分である。他方で英語圏の読者にとっては常識であっても日本の読者にとっては必ずしもピンとこないような事柄や例文には、自然な形でその解説となるような表現が訳文に組み込まれ、訳者おふたりの工夫を感じられる箇所が数多くあった。

本書は英語教育の関係者のみならず、英語に関心のある学生、一般読者に、文法の意味を見直すよい機会を与えてくれるであろう。

(いしぐろ たろう・明治大学教授)